

鹿児島の麓集落における武家住宅の 平面形式に関する基礎的研究

酒匂 大輔* 木方十根**

A Study on the historical transformations of the floor plan of the Samurai Residences
in "Fumoto" villages in Kagoshima

Daisuke SAKŌ* and Junne KIKATA**

In the feudal era, there was an unique regional governance system called "Tojo system" in the Satsuma-Domain (Satsuma, Osumi and Hyuga Regions). The system was composed of 113 divisions (Gou), and governmental villages called "Fumoto" in each divisions. Samurai Residences were constructed in Fumoto villages, and some villages still remains with the historic features.

This study focuses on historical transitions of floor plan of the Samurai Residences. This study deals samples from the three Important Preservation Districts for Groups of Traditional Building (Jyu-Den-Ken Chiku) in Kagoshima Prefecture, Chiran Fumoto, Izumi Fumoto, Iriki Fumoto, and a candidate preservation districts of Kaseda Fumoto.

As a result, three types of the floor plan was classified by the connection between the entrance and main room. Also this paper reports more detailed changes in the floor plans.

Keyword: the Samurai Houses, the floor plan, "Genkan", "Tsuginoma", "Zashiki"

1. はじめに

薩摩藩は武家の割合が全国的にみて非常に高かったため、薩摩・大隅の二国及び日向の諸県郡を 113 の区画に割り、郷土を分散定住させる外城制度という藩独自の支配体制があった。外城（郷）には行政の中心地である「麓」と呼ばれる集落が存在し、麓集落には武家住宅群が形成された。数多く存在する麓のうち、知覧麓・出水麓・入来麓は重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）に選定され（知覧麓：昭和 56 年 11 月選定、出水麓：平成 7 年 12 月選定、入来麓：平成 15 年 12 月選定）、

また加世田麓が重伝建の選定を目指しているよう、武家住宅の遺構が群を成して現在まで残存する麓もいくつか存在する。前述の知覧麓・出水麓・入来麓・加世田麓の武家住宅は、伝統的建造物群保存対策調査等により調査され、またその他の麓集落の武家住宅についても土田充義氏らによって調査されている^{注1}。

これまでの研究で各麓における平面形式の特徴は、各麓によって異なる形式や変遷を辿るということと、さらに武家住宅の基本形式がどういうものなののかということまで明らかにされている（土田 1993）。しかしながら、武家住宅の平面形式を江戸期から明治、大正、昭和初期にかけての変遷を鹿児島の麓集落全体で捉えた体系的な研究がな

2013 年 8 月 30 日受理

* 博士前期課程建築学専攻

** 建築学専攻 教授

く、その実態は明らかではない。特に麓集落の武家住宅は、明治期以降に建設された住宅において、江戸期の武家住宅の形式を継承したものも多く、その変遷を辿ることは、麓集落の明治期以降における武家住宅の平面形式の変化を明らかにする上でも重要であると考えられる。今回は伝統的建造物群保存対策調査によって実測調査された武家住宅の平面形式に着目し比較考察することで、鹿児島の麓集落における武家住宅の平面形式は基本的にどのようなものであるのか、また、明治期以降どのような変遷を辿っているのかに焦点を当てて報告する。

2. 麓集落の武家住宅について

2.1 知覧麓における武家住宅

知覧麓では、伝統的建造物群保存対策調査において28棟の武家住宅の実測調査が行われた。知覧麓の武家住宅は、(1)江戸期、(2)明治初期～中期、(3)明治後期以降の3つの年代で平面形式にそれぞれ特徴があることがわかった(表-1)。

(1) 江戸期：江戸期の建設と推定されるMs家住宅(図-1)とSn家住宅(図-2)は「つぎのま」を保有し、Ms家住宅は玄関よりまっすぐ「つぎの

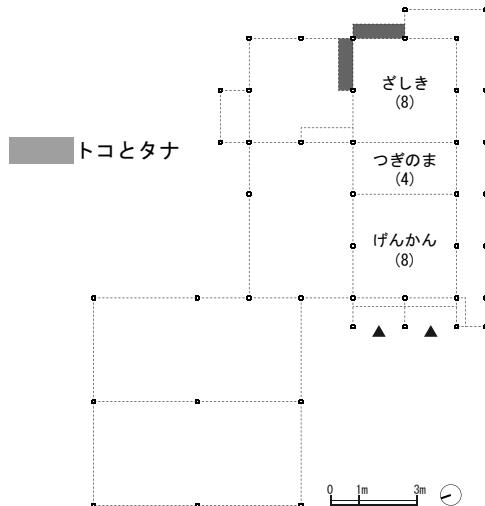


図-1 Ms家住宅復元平面図(寛保年間)

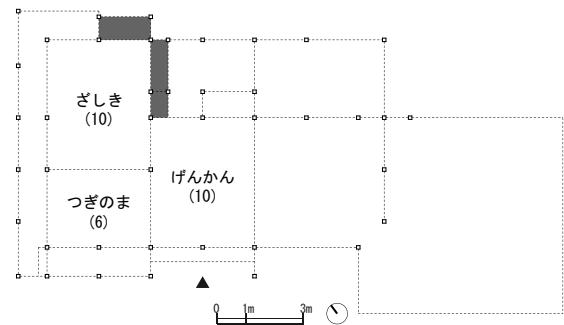


図-2 Sn家住宅復元平面図(江戸末期)

表-1 知覧麓における武家住宅の平面形式に関する特徴

麓名	年代	番号	住宅名称	建設年	梁間規模	接客空間の間取りの形式	「ざしき」が庭と接する面の数	「ざしき」に対する「こざ」「なんど」の構え方
知覧	江戸期	1	Ms家住宅	寛保年間	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1面半	閉鎖的
		2	Sn家住宅	江戸末期	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面半	閉鎖的
		3	村永京子家住宅	江戸末期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	明治初期	4	Hs家住宅	明治初期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		5	佐多民子家住宅	明治中期	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面	開放的
		6	平山亮一家住宅	明治中期	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
		7	Tk家住宅	明治中期	5間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面	開放的
		8	永崎尚尚家住宅	明治中期	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	中	9	深田ハル家住宅	明治25年頃	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		10	Mk家住宅	明治34年頃	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
		11	帖佐隆夫家住宅	明治末期	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		12	森德孝家住宅	明治末期	3間半	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面	開放的
		13	松清信家住宅	明治末期	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		14	平山敏子家住宅	明治末期	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面	開放的
		15	赤崎友安家住宅	明治後期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	明治後期以降	16	三宅マサ家住宅	大正4年頃	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
		17	松元政子家住宅	大正4年頃	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		18	Hs家住宅	大正5年	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		19	木原ヒル子家住宅	大正5年	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		20	寺師安彦家住宅	大正6年	2間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		21	永崎高士家住宅	大正年間	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		22	岩脇サチ子家住宅	大正年間	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	開放的
		23	森兼重家住宅	大正14年	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		24	佐多良治家住宅	大正末期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		25	佐多弘文家住宅	大正末～昭和初	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	開放的
		26	赤崎寿逸家住宅	大正末～昭和初	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		27	石神みづ家住宅	昭和初期	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
		28	高城タミ家住宅	昭和5年頃	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面	開放的

ま」を通って「ざしき」に入りトコとタナに対面する形式であるのに対し、Sn 家住宅は「つぎのま」で鍵型に折れて「ざしき」に入り、トコとタナに対面する形式である。梁間は 3 間半～4 間程で納められる。

また、表一からも分かるように知覧麓における武家住宅の場合は、「つぎのま」を設けた武家住宅が非常に少ない。知覧伝統的建造物群保存対策調査報告書において、前項の Ms 家住宅と Sn 家住宅の所有者の禄高について、Ms 家が 63 石、Sn 家

が 72 石との記載があり、両家とも知覧麓の中で有数の禄高であるが、禄高と武家住宅の平面形式の関係についての言及はない。

(2) 明治初期～中期及び(3) 明治後期以降：知覧麓では、前述で「げんかん」から「つぎのま」を介して「ざしき」のトコとタナと対面するために大きく 2 つの流れがあると述べた。明治期以降になると、一部では「つぎのま」を設けた武家住宅（図一4）がみられるが、「つぎのま」が消えて「げんかん」から「ざしき」へ直接入る 8 曇 4 部屋の整

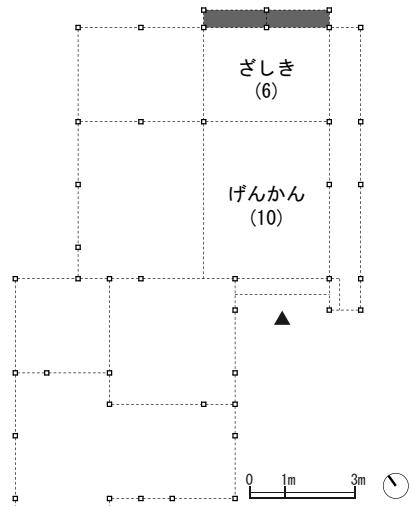


図-3 Hs 家住宅復元平面図（明治初期）

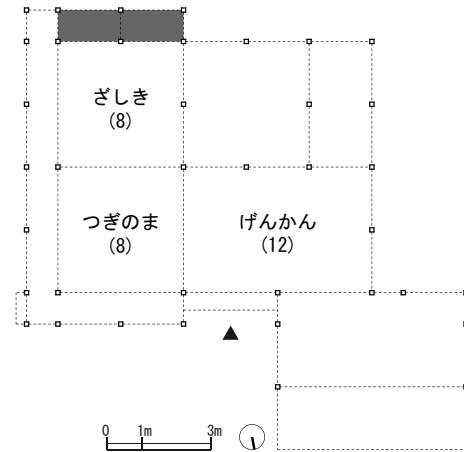


図-4 Tk 家住宅復元平面図（明治中期）

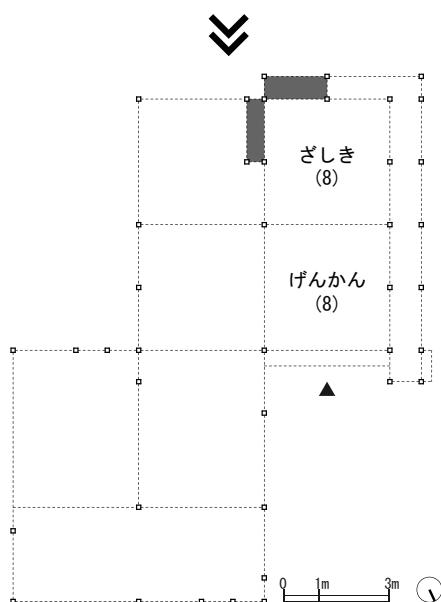


図-5 Mk 家住宅復元平面図（明治34年頃）

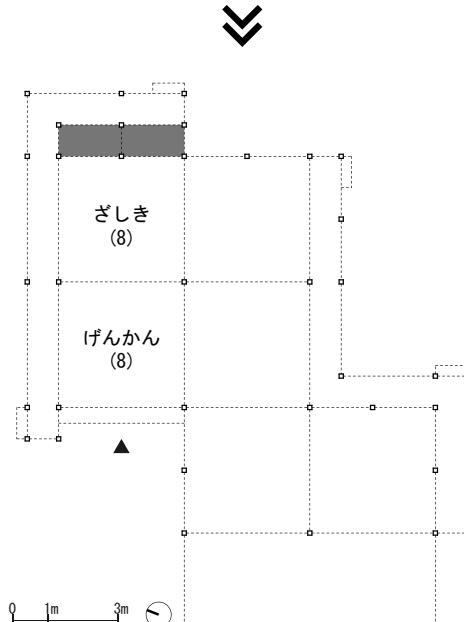


図-6 Hs 家住宅復元平面図（大正5年）

形の間取りに2つの流れは基本的に収束するようになる（図-3～図-6）。これは、接客空間重視の形式から居住空間重視へと徐々に移行していった。梁間は（2）の時期では3～4間、（3）の時期では3間半～4間で納められる。

2.2 出水麓の武家住宅

出水麓では、伝統的建造物群保存対策調査において35棟の武家住宅の実測調査が行われた。出水麓の武家住宅は、（1）江戸期、（2）明治前期、（3）明治中期、（4）明治後期、（5）大正期以降の5つの年



写真-1 Sa家住宅：(手前から) 広間・つぎのま・ざしき

代でそれぞれ特徴があることがわかった（表-2）。

（1）江戸期：江戸期の住宅は、居住部分が独立して居住部分と離れ、その接点に広い部屋が存在した（図-7）。また、「ざしき」を最も奥に据えた接客空間は「つぎのま」、「ざしき」と3部屋が一列に連続して配置される（図-8）。梁間は2間～3間で納められる。

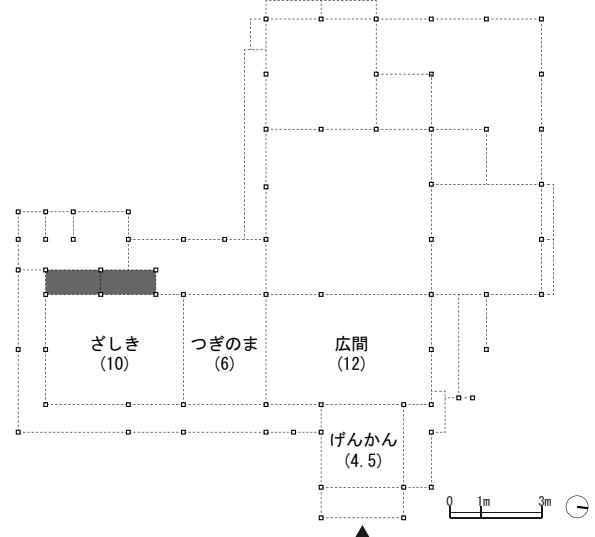
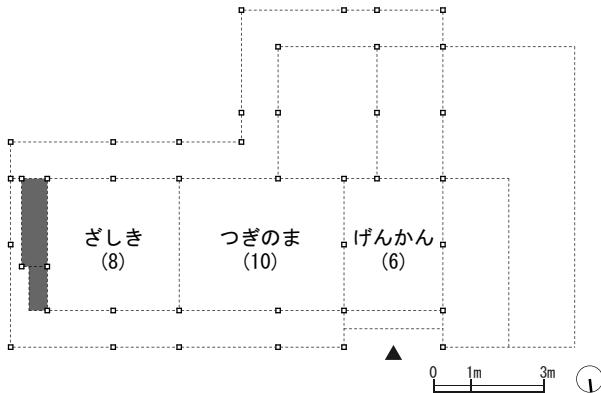


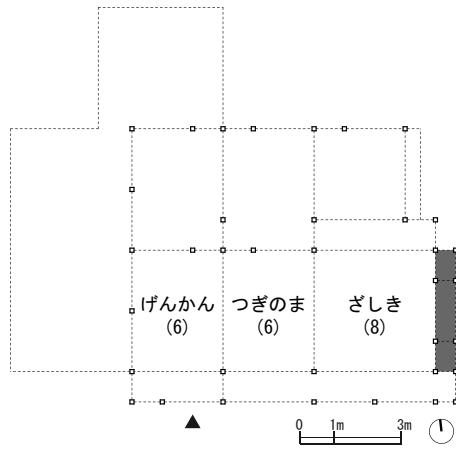
図-7 Sa家住宅家住宅復元平面図（江戸後期：19世紀初期）

表-2 出水麓における武家住宅の平面形式に関する特徴

籍名	年代	番号	住宅名称	建設年	梁間規模	接客空間の間取りの形式	「ざしき」が庭と接する面の数	「ざしき」に対する「こざ」・「なんど」の構え方
江戸期	1	伊牟田茂夫家住宅	伊牟田茂夫家住宅	18世紀～19世紀初	2間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	ざしきが独立
	2	Sa家住宅	Ty家住宅	江戸後期(19世紀初)	3間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	ざしきが独立
	3	鶴飼富美家住宅	江戸末～明治初	2間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	ざしきが独立	
	4	鶴飼富美家住宅	江戸末～明治初	3間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面	開放的	
	5	荒田ツルヨ家住宅	江戸末期	2間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	ざしきが独立	
明治前期	6	伊藤祐輔家住宅	伊藤祐輔家住宅	明治初期	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	ざしきが独立
	7	川俣正巳家住宅	川俣正巳家住宅	明治前半	2間半	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	3面	ざしきが独立
	8	Nk家住宅	Nk家住宅	明治初期	2間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1面	閉鎖的
	9	Ta家住宅	Ta家住宅	明治初期	3間半	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面	開放的
	10	Iy家住宅	Iy家住宅	明治初期	2間半	げんかん・つぎのま・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
明治中期	11	Nt家住宅	Nt家住宅	明治中期	3間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	閉鎖的
	12	二宮周平家住宅	二宮周平家住宅	明治中期	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	開放的
	13	野村ナミエ家住宅	野村ナミエ家住宅	明治中期	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面	開放的
	14	溝口カズ家住宅	溝口カズ家住宅	明治中期	3間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1面	開放的
	15	山口アサ家住宅	山口アサ家住宅	明治中期	2間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
出水	16	壱岐ミチ子家住宅	壱岐ミチ子家住宅	明治19年頃	2間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	-
	17	Uk家住宅	Uk家住宅	明治中期	3間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	18	河野正典家住宅	河野正典家住宅	明治中期以降	2間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
	19	Kt家住宅	Kt家住宅	明治30年	3間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	閉鎖的
	20	川内祐信家住宅	川内祐信家住宅	明治30年代後半	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
明治後期	21	As家住宅	As家住宅	明治30年5月	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	閉鎖的
	22	二階堂知恵家住宅	二階堂知恵家住宅	明治29年8月築	5間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	閉鎖的
	23	Ms家住宅	Ms家住宅	明治37年6月	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	閉鎖的
	24	吉松三樹雄家住宅	吉松三樹雄家住宅	明治末～大正	3間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	閉鎖的
	25	郡山亨家住宅	郡山亨家住宅	明治後期	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
大正期以降	26	中村征洋家住宅	中村征洋家住宅	明治末期	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
	27	前田友義家住宅	前田友義家住宅	明治末～大正	3間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	閉鎖的
	28	郡山三良家住宅	郡山三良家住宅	明治末～大正	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
	29	土持シモ家住宅	土持シモ家住宅	明治後期	3間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2面	閉鎖的
	30	志賀節子住宅	志賀節子住宅	大正11年	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
大正期以降	31	Ms家住宅	Ms家住宅	昭和初期	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1面	-
	32	松野サイ家住宅	松野サイ家住宅	大正初期	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1面	開放的
	33	池田文家住宅	池田文家住宅	大正年間	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
	34	Sa家住宅	Sa家住宅	大正年間	4間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
	35	堀丈夫家住宅	堀丈夫家住宅	昭和初期	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的



図一 8 Ty 家住宅復元平面図（江戸末～明治初期）

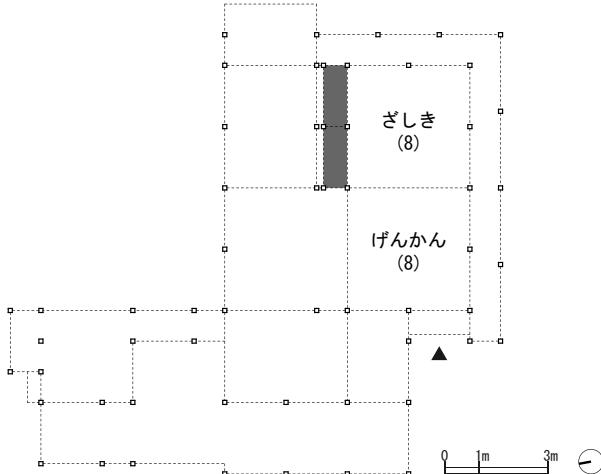


図一 10 Nk 家住宅復元平面図（明治初期）

(2) 明治前期：明治前期の住宅は、居住部分が接客空間の背後に造られ、全体の梁間を広くする方向へ発展する。それは、1間から1間半の下屋で居住空間を付加させる（図一 9、図一 10）。梁間は2間半～4間で納められる。

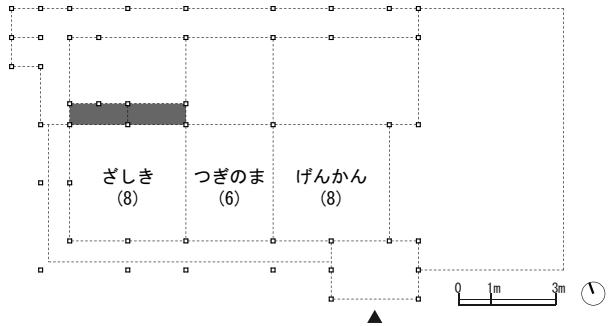


写真一 2 Ta 家住宅：（手前から）つぎのま・ざしき

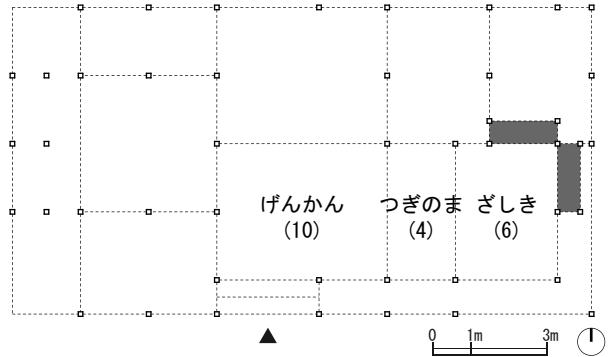


図一 9 Iy 家住宅復元平面図（明治初期）

(3) 明治中期：明治中期の住宅は、基本的に梁間3～3間半で、接客空間を2間半で、1～1間半程を居住空間とするのが一般的となる。接客空間と居住空間の境界は棟方向に真っ直ぐ通る（図一 11、図一 12）。梁間は2～4間で納められる。



図一 11 Nt 家住宅復元平面図（明治中期）



図一 12 Uk 家住宅復元平面図（明治中期）

(4) 明治後期：明治後期の住宅は、第一に3間程の梁間で接客空間を2間、居住空間に1間の下屋を付加し、2間の居住空間を確保する例（図-13）、第二に4間の梁間で接客空間、居住空間をそれぞれ2間とした例がみられる（図-14）。更に半間を加えて、接客空間よりも広い居住空間を確保する例もみられる（図-15）。梁間は基本的に3～4間で納められる。

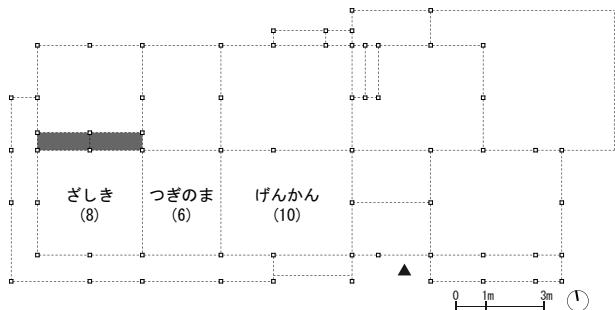


図-13 Kt 家住宅復元平面図（明治 30 年）

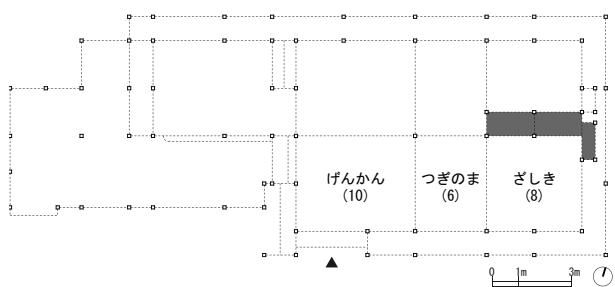


図-14 Ms 家住宅復元平面図（明治 37 年 6 月）

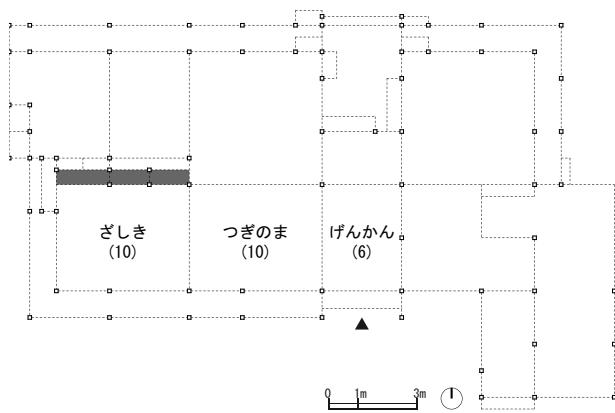


図-15 As 家住宅復元平面図（明治 30 年 5 月）

(5) 大正期以降：3室連続だった接客空間（げんかん・つぎのま・ざしき）、居住空間が2室連続となる（図-16）。また、板敷の応接間が出現し、その背後に「ざしき」を設け、居住空間との明確な区別が崩れてくる（図-17）。梁間は4～4間半で納められる。

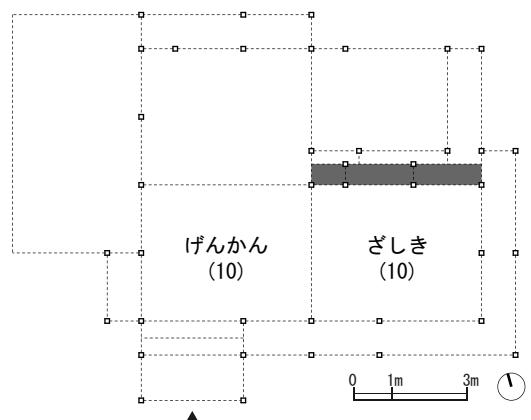


図-16 Sa 家住宅復元平面図（大正年間）

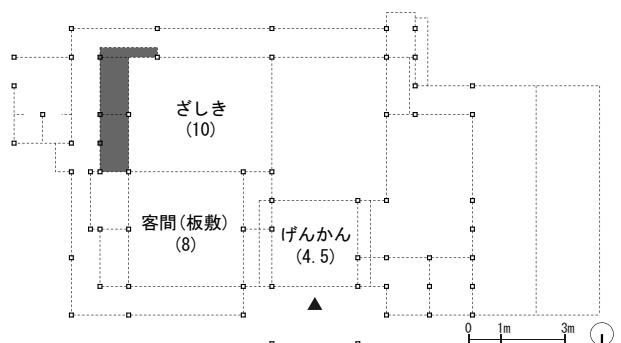


図-17 Ms 家住宅復元平面図（昭和初期）

2.3 入来麓の武家住宅

入来麓では、伝統的建造物群保存対策調査において 27 棟の武家住宅の実測調査が行われた。入来麓の武家住宅は、(1) 江戸期～明治中期、(2) 明治後期以降の 2 つの年代でそれぞれ特徴があることがわかった(表-3)。

(1) 江戸期～明治中期：江戸期の 4 棟はすべて、梁間が 2 間半と狭い。明治初期の武家住宅も、梁間が 2 間半が 2 棟、3 間が 2 棟で、明治初期の 10 棟中 8 棟は 3 間以内である。このため「ざしき」が狭くなっていて、10 棟中 7 棟が 6 畳、残り 3 棟が 4 畠半と、いずれも 8 畠以上を確保した武家住宅の事例はみられない。そのため「ざしき」は、他の麓と比較しても閉鎖的である。トコとタナは直角に配置され、そのときのなんどは非常に閉鎖的な空間となっている(図-18、図-19)。

(2) 明治後期以降：明治中期以降、梁間は 3 間から 3 間半、4 間へと拡張していく。「ざしき」も 8 畠が確保されるようになり、整形の平面構成となる。なんどの間にあったトコとタナは、下図の住宅のように並ぶようになり、なんどが開放的になっていく(図-20、図-21)。

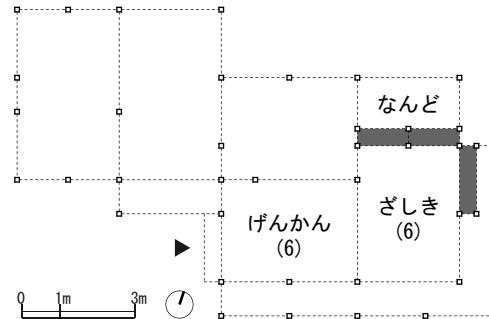


図-18 1m 家住宅復元平面図(江戸末期)

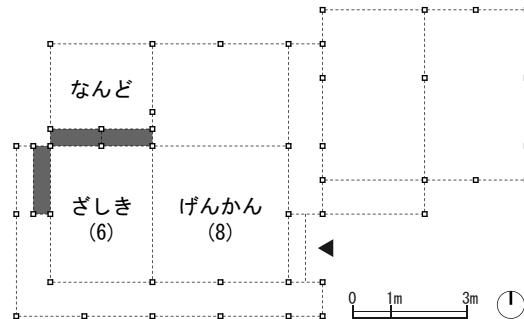


図-19 Mn 家住宅復元平面図(江戸末期)

表-3 入来麓における武家住宅の平面形式に関する特徴

麓名	年代	番号	住宅名称	建設年	梁間規模	接客空間の間取りの形式	「ざしき」が庭と接する面の数	「ざしき」に対する「こざ」・「なんど」の構え方
江戸期 明治中期	1	1m住宅	税所篤行家住宅	江戸末期	2間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	2		長坂マツノ家住宅	文久年間(1861年)	2間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	3		村尾智家住宅	江戸後期	2間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	4		Mn家住宅	江戸後期	2間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	5		清瀬見家住宅	明治初期	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	6		溝口右京家住宅	明治初期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	7		村尾ミヨコ家住宅	明治初期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	8		古河正賛家住宅	明治14年	2間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	9		斧渕国彦家住宅	明治初期	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	10		今村市太郎家住宅	明治中期	2間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
入来	11		田中龍子家住宅	明治中期	3間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2面	閉鎖的
	12		入来院教道家住宅	明治中期(改修)	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	13		大山シカ家住宅	明治中期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	14		勝田ツヤ家住宅	明治中期	2間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	15		神代汎史家住宅	明治末期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	閉鎖的
	16		Em家住宅	明治末期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	17		右田辰馬家住宅	明治末期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	開放的
	18		今村純忠家住宅	大正初期	4間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1面	開放的
	19		是枝国光家住宅	大正3年	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	20		本田親虎家住宅	大正4年	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	開放的
	21		種田幸正家住宅	大正初期	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	22		川添寅清家住宅	大正年間	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	23		丸山幸保家住宅	大正6年	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面半	開放的
	24		1m住宅	大正初期	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	25		成田武徳家住宅	大正3年	3間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	26		樋園義徳家住宅	大正初期	4間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1面	開放的
	27							

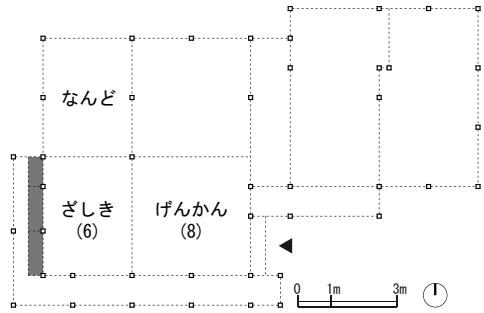


図-20 Em 家住宅復元平面図（明治末期）

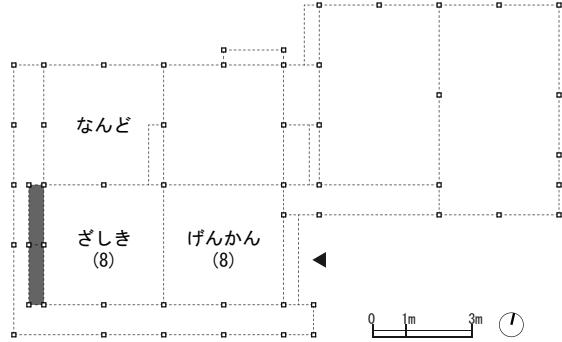


図-21 Im 家住宅復元平面図（大正初期）

2.4 加世田麓の武家住宅

加世田麓では、伝統的建造物群保存対策調査等において 27 棟の武家住宅の実測調査が行われた。加世田麓の武家住宅は、(1) 江戸期、(2) 明治中期 (3) 明治後期～大正期、(4) 昭和初期の 4 つの年代でそれぞれ特徴があることがわかった（表-4）。

(1) 江戸期：1800 年頃は、「げんかん」と「ざしき」が並び、トコとタナは、「ざしき」が庭と二面接するように配置される。梁間は 2 間半～3 間で納められる。また、出水麓と同様に接客空間である「ざしき」が独立している形式が最も古い形式とされる（図-22～図-24）。

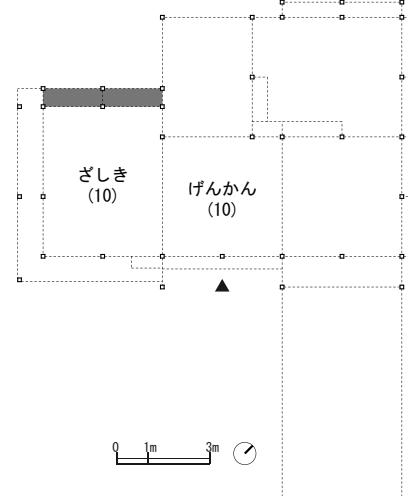


図-22 Mk 家住宅復元平面図（江戸後期）

表-4 加世田麓における武家住宅の平面形式に関する特徴

棟名	年代	番号	住宅名称	建設年	梁間規模	接客空間の間取りの形式	「ざしき」が庭と接する面の数	「ざしき」に対する「こざ」・「なんど」の構え方
江戸期		1	It 家住宅	1800 年	2 間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2 面	閉鎖的
		2	宮原美佐子家住宅	江戸末期	3 間半	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1 面	開放的
		3	市来勝家住宅	江戸末期	3 間半	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1 面半	開放的
		4	大島健一家住宅	1850 年	3 間半	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1 面	開放的
		5	Sh 家住宅	江戸末～明治初	4 間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1 面	開放的
		6	春成畠家住宅	江戸末期	4 間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1 面	開放的
		7	西園國家住宅	江戸末期	2 間半	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1 面半	開放的
		8	指宿卓兄家住宅	慶応年間	3 間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2 面	閉鎖的
		9	Ym 家住宅	明治 12 年以前	3 間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1 面	閉鎖的
		10	神田家住宅	江戸末期頃	4 間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2 面	閉鎖的
加世田		11	本田家住宅	江戸後期	3 間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2 面	閉鎖的
		12	川越康民家住宅	江戸後期	3 間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2 面	閉鎖的
		13	Mk 家住宅	江戸後期	3 間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2 面	閉鎖的
		14	鮫島健志住宅	明治 20～30 年頃	4 間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1 面半	閉鎖的
		15	鮫島望家住宅	明治 20 年代	3 間半	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1 面	開放的
		16	岩城家住宅	1880～90 年	4 間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1 面	開放的
		17	Om 家住宅	明治 20 年頃	4 間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	2 面	閉鎖的
		18	猪鹿倉家住宅	明治 20 年代	4 間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2 面	閉鎖的
		19	As 家住宅	明治 36 年	4 間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1 面	開放的
		20	郷之丸家住宅	明治 30 年代	3 間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1 面半	開放的
		21	Kk 家住宅	明治 30 年頃	4 間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	2 面	閉鎖的
		22	Si 家住宅	明治 35 年	4 間半	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1 面	開放的
		23	Ot 家住宅	大正 11 年	4 間	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1 面	開放的
		24	楠本慶明家住宅	大正 2 年頃	4 間	洋間・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1 面	開放的
		25	Hm 家住宅	昭和 9 年	3 間半	げんかん・ざしきが並ぶ配置	1 面	開放的
		26	Os 家住宅	昭和 5 年頃	4 間	げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ配置	1 面	開放的
		27	旧指宿家住宅	昭和初期	4 間	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ配置	1 面	開放的



写真-3 Mk 家住宅：ざしきのトコとタナ

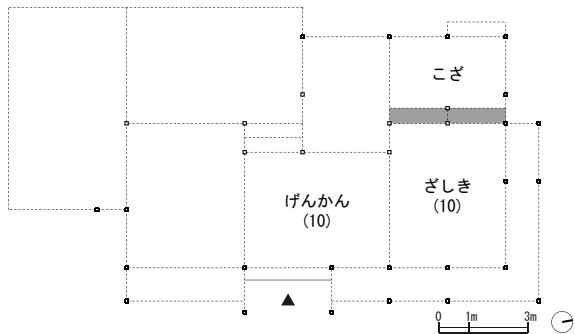


図-23 It 家住宅復元平面図 (1800年)

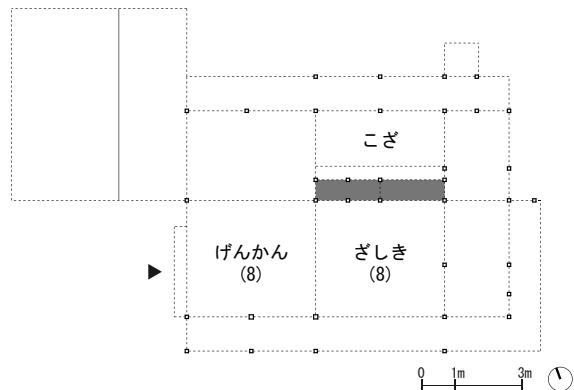


図-24 Ym 家住宅復元平面図 (明治12年以前)



写真-4 Ym 家住宅：ざしきのトコとタナ

また、江戸末期になると、「げんかん」が分化し、「つぎのま」が設けられる。その結果、「げんかん」、「つぎのま」、「ざしき」が鍵型に配置され、トコとタナは「ざしき」が庭と一面接するように配置される（図-25）。梁間は3～4間で納められる。

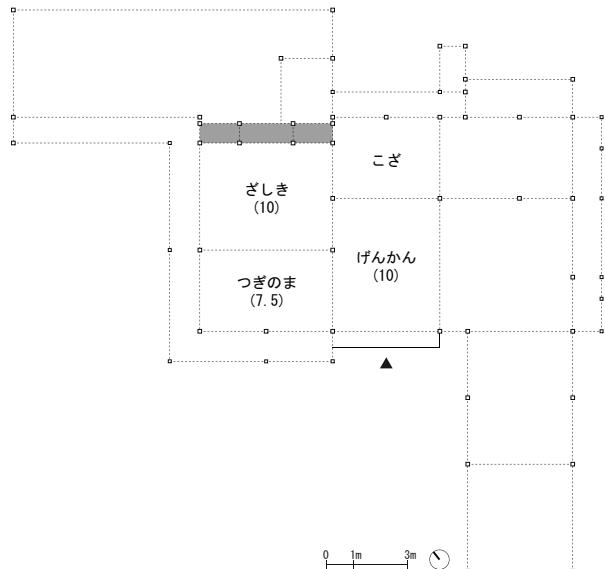


図-25 Sh 家住宅復元平面図 (江戸末～明治初)

(2) 明治中期：「げんかん」、「つぎのま」、「ざしき」が一直線に配置される形式が現れる。トコとタナ、「ざしき」が庭と二面接するように配置される。梁間は4間程度で納められる（図-26）。

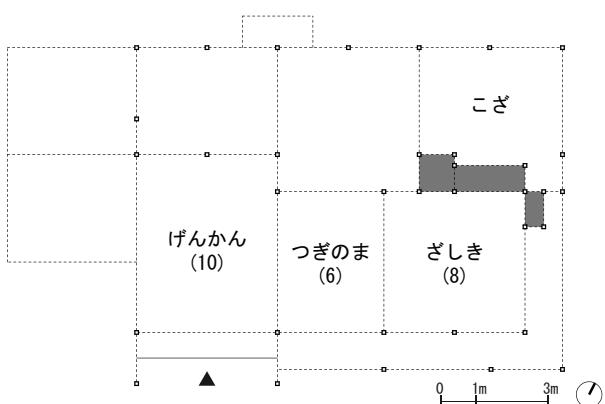


図-26 Om 家住宅復元平面図 (明治20年頃)



写真-5 0m家住宅：ざしき

(3) 明治後期～大正期:「げんかん」、「つぎのま」、「ざしき」が一直線に配置される形式と、「げんかん」、「ざしき」が並ぶ形式が現れる。トコとタナは、次第に「ざしき」が庭と二面接するような配置から、庭に対して一面に面するように配置される。梁間は3間半～4間半で納められる（図-27～図-30）。

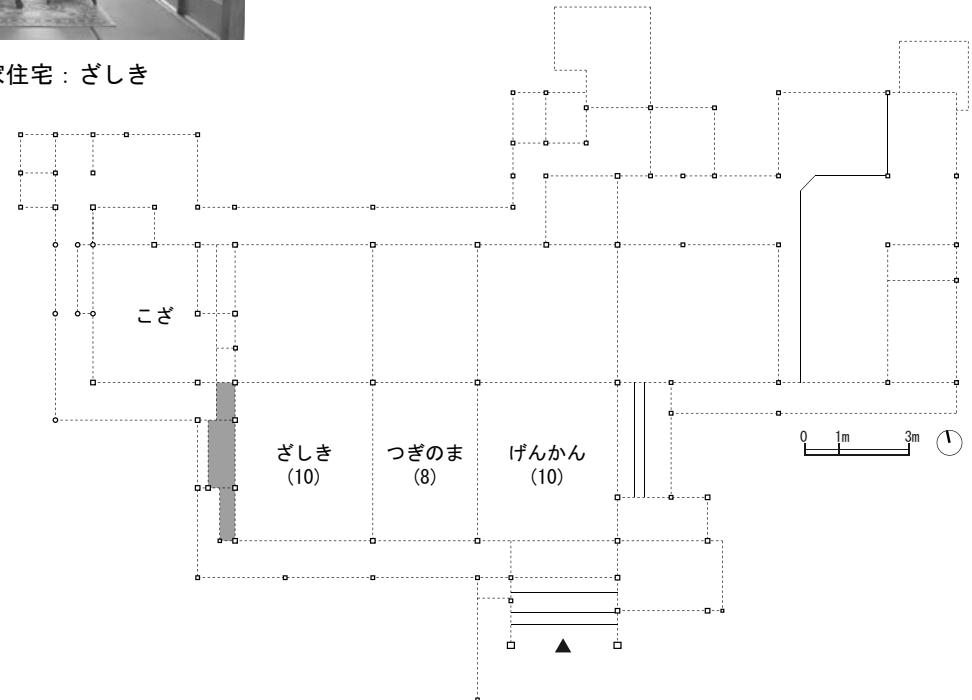


図-27 As家住宅復元平面図(明治36年)

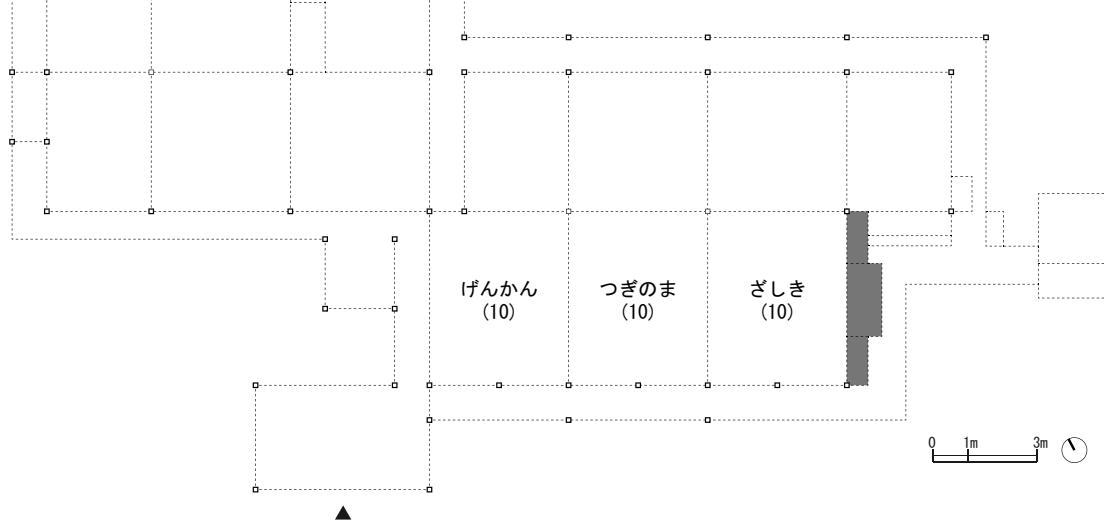


図-28 Si家住宅復元平面図(明治35年)



写真-6 As 家住宅：ざしきのトコとタナ

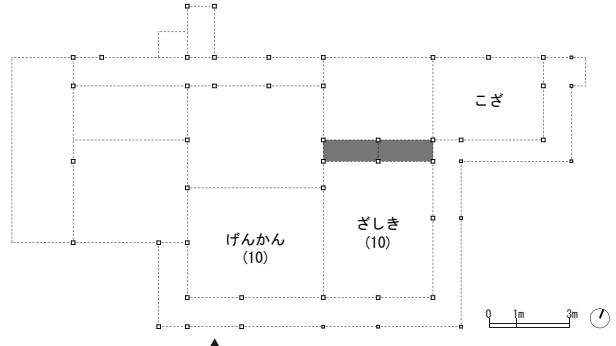


図-29 Kk 家住宅復元平面図 (明治 30 年頃)



写真-7 Si 家住宅：ざしきのトコとタナ



写真-10 Kk 家住宅：げんかん



写真-8 Si 家住宅：つぎのま（奥）

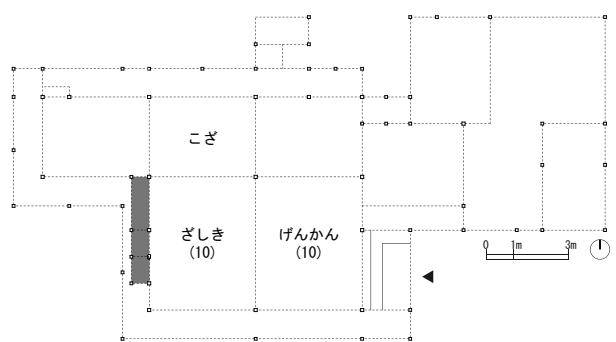


図-30 0t 家住宅復元平面図 (大正 11 年)



写真-9 Si 家住宅：(手前から) つぎのま・ざしき (明治 35 年頃)



写真-11 0t 家住宅：ざしきのトコとタナ

(4) 昭和初期：昭和初期の住宅は、江戸期や大正期の住宅の類似する平面形式がみられるが、中廊下が設けられていることが特徴的である。梁間は4間程で納められる（図-31、図-32）。

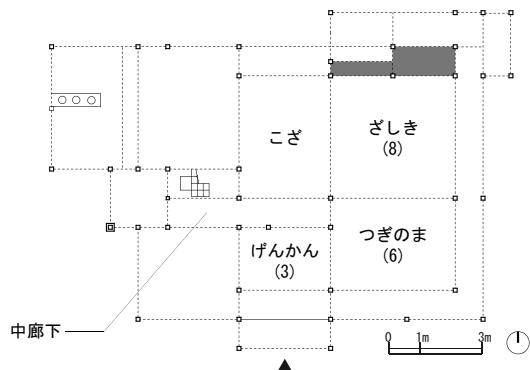


図-31 0s 家住宅復元平面図（昭和5年頃）

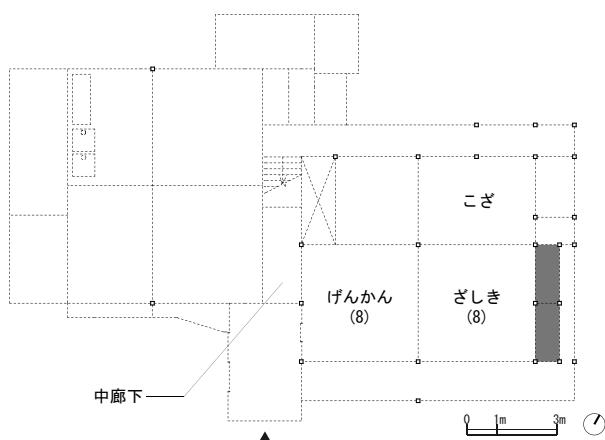


図-32 Hm 家住宅復元平面図（昭和9年）



写真-12 0s 家住宅：ざしきのトコとタナ

3 麓集落（知覧・出水・入来・加世田）における武家住宅の平面形式の特徴と基本形式

土田氏らによると、武家住宅の古い形式というのは、「ざしき」の縁側が二方向に設けられ、「ざしき」が庭に二面接し開放的になっていること、また、「こざ」や「なんど」は「ざしき」に接しながらも入口がないため閉鎖的な造りであると述べている。以上を踏まえながら、2章より接客空間の間取りの形式、庭に対する「ざしき」の構え方、「ざしき」に対する「なんど（こざ）」の構え方の3つに加え梁間規模の4つの項目に着目して、各麓の年代毎の平面形式に関する一般的特徴について表に示した（表-5～表-8）。これらを比較して麓集落における武家住宅の平面形式の特徴と基本形式について以下に示す。

3.1 平面形式の特徴

3.1.1 接客空間の間取りの形式

知覧麓と加世田麓では、年代毎に異なる接客空間の間取りがみられる。しかし、知覧麓では明治後期以降は一つの平面形式に収束するのに対し、加世田麓では、明治期に入って新しい接客空間の間取りが現れたり、昭和初期に入って江戸期にみられる古い形式の間取りがみられる。また、出水麓と入来麓では各年代を通して、同じ接客空間の間取りがみられ、これが時代の推移によってあまり変化が見られない。

3.1.2 庭に対する「ざしき」の構え方

知覧麓と加世田麓では明治中期以降、「ざしき」は庭と一面接する。知覧麓は基本的に妻側から入って、「ざしき」の突き当たりのトコとタナに対面する形式で、加世田麓は基本的に平側から入り鍵型に折れて、「ざしき」のトコとタナに対面する形式である。または、出水麓と入来麓では各年代を通して、「ざしき」は庭と一面半もしくは二面接する。

3.1.3 「ざしき」に対する「なんど（こざ）」の構え方

知覧麓と入来麓、加世田麓では明治中期以降、開放的になるのに対し、出水麓では江戸期から閉鎖的である。これは、加世田麓では接客空間と居住空間を一体として使用していた事例があったこ

とがヒアリング調査により分かったが、明治中期以降に整形の間取りをとるようになる知覧麓や入来麓でも同様の事例があったことが推測される。それに対し、出水麓では、「ざしき」が庭に対して二面接するため、トコとタナの位置が必然的に接客空間と居住空間の間に配置されるため、それらを一体的に使用していたとは考えにくい。

3.1.4 梁間規模

各年代の梁間規模は、明治中期以降は基本的に

3～4間程に収束するが、江戸期における知覧麓と加世田麓の梁間規模は、出水麓、入来麓と比較して半間～1間程大きい。

3.2 平面形式の基本形式

今回事例として挙げた知覧麓・出水麓・入来麓・加世田麓の武家住宅は、表-5～表-8より3つの平面形式に類型されることが分かる。

第一は、4つの麓集落でみられる平面形式であり、

表-5 知覧麓における年代毎の平面形式に関する一般的傾向

年代	接客空間の間取りの形式	庭に対するざしきの構え方	ざしきに対するなんど(こざ)の構え方	梁間規模
(1)江戸期	1. げんかん・ざしき・つぎのまが一直線に並ぶ形式 2. げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ形式	庭に対して一面半接する	基本的に閉鎖的	3間半～4間
	1. げんかん・ざしきが並ぶ形式 2. げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ形式			
(2)明治初期～中期	1. げんかん・ざしきが並ぶ形式 2. げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ形式	庭に対して一面接する	開放的	3～4間
	げんかん・ざしきが並ぶ形式			
(3)明治後期以降	げんかん・ざしきが並ぶ形式	庭に対して一面接する	開放的	3間半～4間

表-6 出水麓における年代毎の平面形式に関する一般的傾向

年代	接客空間の間取りの形式	庭に対するざしきの構え方	ざしきに対するなんど(こざ)の構え方	梁間規模
(1)江戸期	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ形式	庭に対して二面接する	接客空間と居住空間が独立しているため、ざしきとこざは離れている	2～3間
(2)明治前期	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ形式	庭に対して二面接する	閉鎖的	2間半～4間
(3)明治中期	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ形式	庭に対して二面接する	閉鎖的	2～4間
(4)明治後期	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ形式	庭に対して二面接する	閉鎖的	3～4間
(4)大正期以降	げんかん・ざしきが並ぶ形式	庭に対して二面接する	閉鎖的	4～4間半

表-7 入来麓における年代毎の平面形式に関する一般的傾向

年代	接客空間の間取りの形式	庭に対するざしきの構え方	ざしきに対するなんど(こざ)の構え方	梁間規模
(1)江戸期～明治中期	げんかん・ざしきが並ぶ形式	庭に対して一面半接する	閉鎖的	2間半～3間
(2)明治後期以降	げんかん・ざしきが並ぶ形式	庭に対して一面半接する	開放的	3間半～4間

表-8 加世田麓における年代毎の平面形式に関する一般的傾向

年代	接客空間の間取りの形式	庭に対するざしきの構え方	ざしきに対するなんど(こざ)の構え方	梁間規模
(1)江戸後期	1. げんかん・ざしきが並ぶ形式 2. げんかん・つぎのま・ざしきが鍵型に並ぶ形式	庭に対して二面接する	基本的に閉鎖的	2間半～4間
	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ形式			
(2)明治中期	1. げんかん・ざしきが並ぶ形式 2. げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ形式	庭に対して一面接する	開放的	4間程
	げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ形式			
(3)明治後期～大正期	1. げんかん・ざしきが並ぶ形式 2. げんかん・つぎのま・ざしきが一直線に並ぶ形式	庭に対して一面接する (地区間で差あり)	開放的 (地区間で差あり)	3間半～4間半
	(1)や(2)の時期の間取りがみられる			
(4)昭和初期		庭に対して一面接する	開放的	4間程

特に明治後期以降の知覧麓、入来麓、江戸期の加世田麓でみられる①「げんかん」と「ざしき」が並ぶ形式で、この平面形式は、「ざしき」が庭と二面もしくは一面半接する形式が江戸期から明治中期にかけてよくみられ、「ざしき」が庭と一面接する形式が明治後期以降によくみられる。

第二は、特に明治中期の知覧麓、江戸期の加世田麓でよくみられる平面形式であり、明治中期以前によくみられる②「げんかん」と「つぎのま」と「ざしき」が鍵型に並ぶ形式である。この平面形式は、基本的に「げんかん」から入り、「つぎのま」を鍵型に曲がりトコとタナに対面するという形式のため、「ざしき」は庭と一面接するようになっている。また、「ざしき」の横の居室（こざやなど等）の居住空間へ往来できる形式がほとんどである。

第三は、出水麓、明治中期以降の加世田麓でよくみられる③「げんかん」と「つぎのま」と「ざしき」が一直線に並ぶ形式である。この平面形式は、「ざしき」が庭と二面もしくは一面半接する形式が出水麓では明治後期まで、加世田麓では明治中期までみられ、「ざしき」が庭と一面接する形式が明治後期以降、加世田麓でみられる。

4.まとめと課題

今回得られた知見を以下に示す。

- (1) 知覧麓と加世田麓では、年代毎に異なる接客空間の間取りがみられるのに対し、出水麓と入来麓では、各年代を通して同じ接客空間の間取りがみられる。
- (2) 知覧麓と加世田麓における明治中期以降の武家住宅の「ざしき」は、庭に対して一面接するのに対し、出水麓と入来麓では、一面半もしくは二面接する。
- (3) 知覧麓と入来麓、加世田麓における明治中期以降の武家住宅の「なんど（こざ）」は、「ざしき」に対して開放的であるのに対し、出水麓では、江戸期から閉鎖的である。
- (4) 梁間規模は、基本的に3～4間程に収束する。知覧麓と加世田麓における江戸期の武家住宅は、同時期の他の麓と比較して半間～1間程大きい。

(5) 今回対象とした武家住宅の平面形式は、①「げんかん」と「ざしき」が並ぶ形式、②「げんかん」と「つぎのま」と「ざしき」が鍵型に並ぶ形式、③「げんかん」と「つぎのま」と「ざしき」が一直線に並ぶ形式の3つに分類される。

以上より、知覧麓や加世田麓の武家住宅のように、時代の推移とともに、平面形式が変化していくのに対し、出水麓や入来麓の武家住宅では、あまり変化がみられなかった。つまり、近い麓集落同士で平面形式に類似性がみられたということが指摘できる（知覧麓と加世田麓は南薩地域、出水麓と入来麓は北薩地域）。また、出水麓のように武家住宅の古い形式が、明治期以降にも受け継がれていることが確認された。これらは、鹿児島麓集落における武家住宅の平面形式の全体像を把握するうえで一つの指標となることが考えられる。また、この結果を受けて、今回対象とした麓集落以外の武家住宅にも目を向けて考察しなければならないことも明らかとなった。

謝辞

南さつま市加世田の武家住宅の実測調査では、大変多くの方々にご協力いただいた。武家住宅の当主の方々をはじめ、南さつま市教育委員会の方々に感謝申し上げます。また、実測調査にご協力いただいた研究室の皆さんにこの場を借りて感謝申し上げます。

図版出典

図-1～図-6：参考文献2) より筆者作成

図-7～図-17：参考文献1) より筆者作成

図-18～図-21：参考文献3) より筆者作成

図-22～図-32：参考文献4) より筆者作成

写真-1～8、10～12：筆者撮影

写真-11：当主提供

注

注1：土田充義、小山田善次郎、揚村固、「出水麓の武家住宅の遺構：薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究2」、日本建築学会研究報告九州支部、1989.3.1

土田充義，揚村固，守安聰司，「入来麓の武家住宅の遺構：薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究 12」，

日本建築学会研究報告九州支部，1991. 3. 1

木村紀博，土田充義，小山田善次郎，揚村固，「志布志麓の武家住宅の遺構：薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究 14」，日本建築学会研究報告九州支部，1991. 3. 1

木村紀博，土田充義，小山田善次郎，揚村固，岩元俊一，「知覧麓の武家住宅の遺構：薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究 19」，日本建築学会研究報告九州支部，1992. 3. 1

土田充義，小山田善次郎，揚村固，木村紀博，岩元俊一，「大口麓の武家住宅の遺構：薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究 24」，日本建築学会研究報告九州支部，1992. 3. 1

土田充義，小山田善次郎，揚村固，木村紀博，岩元俊一，「蒲生麓の武家住宅の遺構：薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究 25」，日本建築学会研究報告九州支部，1992. 3. 1

土田充義，小山田善次郎，揚村固，木村紀博，岩元俊一，「高岡麓の武家住宅の遺構：薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究 26」，日本建築学会研究報告九州支部，1992. 3. 1

土田充義，揚村固，松永泰孝，「国分麓・敷根麓・清水麓の武家住宅の遺構：薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究 33」，日本建築学会研究報告中国・九州支部，1993. 3. 1

土田充義，晴永知之，揚村固，「旧薩摩藩における加世田麓・垂水麓・清水麓・国分麓・敷根麓の武家住宅に関する研究」，鹿児島大学工学部研究報告(35)，1993. 9

参考文献

- 1) 出水市教育委員会，『出水麓 伝統的建造物群保存対策調査報告書』，1989. 3. 31
- 2) 知覧町教育委員会，『知覧麓の武家屋敷群 伝統的建造物群保存対策調査（見直し）報告書』，1991. 3. 31)
- 3) 日本ナショナルトラスト，『清色城と入来麓武家屋敷群』，1991. 3. 31
- 4) 南さつま市，『南さつま市加世田地区 伝統的建造物群保存対策調査報告書』，2013. 3
- 5) 土田充義，晴永知之，揚村固，「旧薩摩藩における加世田麓・垂水麓・清水麓・国分麓・敷根麓の武家住宅に関する研究」，鹿児島大学工学部研究報告(35)，1993. 9